

保育者養成と子育て広場 —— 1年半の体験学習からの検討 ——

佐々 加代子

はじめに

現代社会は子育て状況にもさまざまな変化をもたらしてきた。保護者たち自身が「孤育て」という用語で子どもと向かい合う育児の閉塞感を表現するようになってきた。日々の報道に乳幼児の虐待がないことがないくらいにさえなっている。子育て支援は、保健婦、臨床心理士、相談活動に携わる人たち、教員、保育士、などに加えて、すべての子どもをもつ保護者を対象とした、一定の時間の預かり保育をする「ファミリー・サポート・センター」に登録する援助者たち（その地域に在住する20歳以上の住民）などにも求めている。また、小学校から高等学校までの生徒たちに、保育園や幼稚園の子どもとのふれあいの場の体験や、さらにすすんでボランティア活動の体験もするように要請もしている。

地域の子育て支援関係のNPO法人を初めとして、保護者たちの集団活動もその地域の子育て支援に寄与してきている。それらがさらに広域にネットワークを形成してともに組みながら協働し、広くは日本の子育て支援の輪として機能していくことも意図した取り組みもある。自治体独自のネットワークも民営もまきこむことも進んできた。このように、社会全体がその体制において、そこに多くの人材を抱えて子育て支援になんらかで携われるようにしていくようにできてきているとも言えようが、実際にその支援の一環にかかわる人はそれほど多くはないし、その体制においても十分に機能しているとは言いがたい現状がある。

ところで、保育・教育専門職はこれから先においてもそれぞれの保育・教育・福祉の現場に携わるだけではなく、その地域のあるいはさらに広域においてもその専門職ゆえに支援者として求めら

れてくることが想定される。人材の輩出にかかわる保育者養成機関はしたがって、現在の養成内容に加えて、現況分析から得た子育て支援に求められる内容をその教育課程に盛り込み、実践していくこと、その成果を挙げていくことによって、より優れた人材を卒業時に輩出することが求められてこよう。さらに、そのように養成された卒業生たちがそれぞれの職場に就いてから、その地域からも求められてくる子育て支援の実践に携わること、その実践内容について評価・検討することを通して、その地域に求められている子育て支援の内容の充実を、さらにネットワークのなかで見えてきたことを実践と重ねて検討をことによって、子育て支援に携わるその「キャリア」に求められる「質」の検討にもつながるのではないだろうか。

ここでは、保育者養成期間内に、現在の養成課程には組み入れられていない「子育て広場の体験学習」を1年半積み上げた学生たちの事例からの検討を加えることから、新たな保育者養成のありかたの検討をする。

I. 子育て支援の体験学習を加えた、保育者養成課程の実践

学生たちの子育て支援の体験学習の場は白梅学園短期大学・大学で開設している子育て広場の7つのうちの2つ（子育て広場きららと紅茶の会）に加えて地域の子育て広場などがある。

1) 養成機関と体験学習の場について

(1) 養成機関と体験学習の期間

白梅学園短期大学保育科佐々ゼミナールに配属された学生たち14名。2004年9月下旬の1年生後期に配属されてから2年次1年間を加えた1年半のゼミナール期間。18ヶ月の体験学習

になる。ゼミナール時間内に開催することが可能であったのは、1年生のゼミナールのときの10時半から12時10分までの時間帯のなかで可能であった広場であり、そのほかは任意での参加になる。学生たちはゼミナール選択をするときに子育て広場体験ができることがあったという。そのことへの参加も含めて学生たちはゼミナール選択を自分の養成課題に子育て広場など

を通して、さらによい保育者に向かいたいという動機があったことになる。

1年生の時点では2年生と一緒に活動した。卒業生も随時参加している。子育て支援現場では、従って教員と卒業生、1、2年生の層があったことになる。

(2) 学生たちが体験した子育て広場

表1に学生たちが体験した子育て広場をまとめ

表1 学生たちが体験した子育て広場

子育て広場 内容	紅茶の会	白梅祭	K-net	昭島福祉祭り	きらら	きらら in 白梅
保育理念	見守られながら遊び、集える場	四季の中で子供になるう。子どもと遊ぼう	親子が気軽に立ち寄れる場所	福祉祭り	(子育て中の)親子が遊べる場所の提供	(子育て中の)親子が遊べる場所の提供
広場の形態	遊びの広場	広 場	広 場	一時預かり	広 場	広 場
保育形態	自由 (一部提供)	提 供	混 合	自由・提供	自 由	自 由 (一部提供)
参集児の 推定年齢	0.2~9歳	1~11歳	0.2~10歳	0.2~10歳	0.1~100歳	0.1~
年齢幅	小	中	中	中	大	中
保護者	父・母	父・母・ 祖父母	母	父・母	母	母
会 場	大 学 (大体・小体・ ホール)	大 学 (I23・24)	会議室開放	保健福祉 センタープ レールーム	小平市 高齢者館	大 学・ 大 短 期 大 学
設 営	一 部 場 づ ぐ り	設 置	一 部 場 づ ぐ り	既 設	一 部 場 づ ぐ り	一 部 場 づ ぐ り
運 営 側 ス タ ッ フ	大学教員・ 卒業生 (保育士)・ 学 生	大学教員・ 卒業生 (保育士)・ 学 生	保育サポ ーター・学生	保育サポ ーター・学生	保育サポ ーター・学生	保育サポ ーター・大 学 教 員 ・ 学 生
開 催 回 数	月に1度	年に1度	月に1回	年に1回	月に1回	月に1回
利用者総数	50人 (登録制)	(不特定多数)	80人 (不特定多数)	100人 (不特定多数)	16~50人 (不特定多数)	(不特定多数)
遊 具	提 供 型	提 供 型	設 定 型	提 供 型	提 供 型	提 供 型
そ の 他 の 特 徴	保護者同士のつながり、 広がりがある。佐々 (教員)育児 相談・責任 者	長時間遊ぶ ことができる。	清瀬市主催	一時預かり のため、予 測が難しい 佐々(教員) 育児相談・ 責任者	異世代交流	きららサポ ーターが運 営 佐々(教 員)顧問

た。広場の特性などを縦軸に横軸に子育て広場の名称を加えた。卒業までに6つの広場の体験をしたことになる。対象年齢は1ヶ月児から高

齢者までの参加があったために、100歳までの年齢幅がある。世代間交流の現場の体験もしたことになる。参加した学生個人の体験は他の学

生にも提供された。それを共有することで間接体験になっていった。直接体験と間接体験の両方をゼミナール学生全員が体験したということになる。このように体験を全体化してくることによってこの表には学生人数は記載していない。K-net は 5 回、福祉まつりは 2 回、白梅以外の子育て広場きららへの参加は 3 回、白梅内での子育て広場きららへの参加は 8 回になる。紅茶の会の学生個人の最大は 15 回で最少でも 10 回

になっていた。子どもたちの 1 ヶ月ごとの変化が見られるということでは登録型の「紅茶の会」になる。1 回の最大参加人数は 14 名、最少で 5 名である。保育所実習期間と重なりがあった 1 回をのぞいて、18 回中 17 回学生たちは参加している。

- 2) 学生たちの子育て広場づくりの学習段階
表 2 に示したが 4 段階に区分できる。①観察体験（広場を知る）段階、②体験学習（部分

表 2 子育て広場づくりの学習段階

段 階		行ったこと・学んでいったこと	参加・運営したもの
第一段階	観察体験 (広場を知る)	広場を体験し、広場の機能を知る。	2004. 夏 K-net
第二段階	体験学習 (部分実習)	広場づくりに参加し、部分的にやってみる。	2004. 秋 白梅祭 きらら
第三段階	保育体験	部分的に責任を担いながら内容作り・充実を体験する。	2005. 春 昭島福祉祭り きらら
第四段階	運 営	企画～立案～評価・反省まで主催者側になり広場づくりをする。	2005. 夏 白梅祭

実習) 段階、③保育体験の段階、④運営の段階、である。観察体験は前年度の先輩たちが中心になって運営してきた子育て広場で、参加者でありながら観察をするという体験も含まれる。紅茶の会は 1 年半の継続的な参加になっている。この期間は、子どもたち、その保護者たちと学生たち、そこにときどき加わる卒業生たち（現職の保育士、子育て支援関係で動いている人）がともに育ちあう関係を築いてきた長さとも一致する。1 か月に一度の開催ということで、子どもたちの育ちの期間が 1 ヶ月ごとに体験できること、その次に出会ったときに、その間に育った 1 ヶ月が見えてくることになった。「発達する」ということを観察すること、またはかかわることで体験を重ねることができたことになる。この場の体験は養成機関の教育課程には組み入れられていないものである。実習期間で学んだ内容よりもより濃いものが経験できているとい

う。
1 年半の子育て広場の参加体験は学びの段階にまとめたように、学生個々人が段階をふみながら育っていった。4 段階中、第一段階の観察体験は 1 年次全般、第二段階の体験学習は 1 年次白梅祭で、第三段階保育体験と第四段階運営は 2 年次になる。

- 3) 白梅学園子育て広場「紅茶の会」の体験学習
(1) 場創りのねらい

広場のなかでの子どもたちには、その空間と場のなかでのびのびと自由に遊べるようにし、保護者たちには育児の悩み解消に加えて、この場の体験から今後の育児に安心して取り組めるような機会の場になれるように、ということを用意した。相談活動は教員の筆者が担い、保護者たち同士がともに育ち合えるような場づくりの配慮をした。この援助内容そのものを同じ場で観察することは、学生たち自身に子育て支援

のさまの学習になるものにとらえた。学生の参加のし方としては、保護者との対応を学びたい場合は、教員の近くにいることにして教員と保護者の対応を学ぶことになる。保護者集団の間で交わされる内容について関心を持った場合には、保護者たちの近くに居乍ら、そこで話される内容を聞きとめていくことにしたという。子どもとのかかわりについては保護者からの問いかけもある。学生たちは自分自身が子どもとの間でかかわったときに感じたことを発言するようにしていた。嬉しい体験でもあったという。教員、卒業生、学生としての自分、そして保護者とともに、見守り育てているということを感じとっているようであった。季節のことを感じてもらいながら、この場が常に子どもたちや保護者たちにとってひと時の過ごし方がおだやかでのびのびできるように配慮するようにした。その時々の子どもたちの名札づくりの工夫をした。

(2) 学生たちからの(参加体験からの感想)

学んだこと段階は三、四に相当する。

実習の体験においては日々の記録の記載をし、一定の部分や責任実習をする。この体験学習では日々の記録のみならず、企画・立案から運営までを担ってきた。記録としてはVTRや写真もあり、体験の中での詳細な内容についてそれらを活用しながら体験のまとめを重ねてきた。とまどったことや嬉しかった体験については記録に加えて仲間同士からの感想も加えられている。検討しあう内容についてはゼミナール活動において相互に出し合っていくことになった。積み重ねてきた。ゼミナール時間外に話合う時間が使われている。学んだこととして以下がまとめられた。

①参加する子どもたちの人数と幅が当日でないとわからないなかでの場の設営、安全性の確保、遊びの提供と工夫、見守りのなかでの援助のありかた内容についての理解を深められたこと、子どもの育ちを見る目が養われた。

②1か月という期間の長さは子どもが成長していく目安としての単位としてあることを実感した。これほどの成長があるのかということに驚いたし、観察、かかわることで、どのようなことが発達・育ちの変化であるのかの理解が深まった。

③14人のゼミ生の子育て広場での体験学習の育ちの段階はおおよそ同じで4段階あることがわかった。

- i. さまざまな異年齢の子どもたちとのびくびくどきどき体験(写真1)
- ii. この子ども(たち)とこのあそびなら一緒にできるかと思えて遊びをしかけてみることができるようになる。その結果がわかると、うまくいかなかったときには何がだめだったのかがわかってくるし、よかったときにはどのようなことがよかったのかについての評価ができる。
- iii. どのような子どもたちに対しても、工夫しながら遊べるようになる
- iv. 多くの子どもたちを見守りながら、複数の子どもたちとも同時にかかわることができるようになる

④子どもたちが育っていく「速さ」は育ちの過程についての学習を深めさせてくれた。それに比べて自分たちはどうなのだろうかと考えさせられた。

⑤「育つということ」について、子どもたちの育ち、保護者たちの変化、私たち自身の過程をふりかえることで学んだ。ともに育ってきているということに気づいた。

⑥「みんなで育っていく過程」を場の構成メンバー(教員や卒業生も含めて)と時間を共有したことで理解が深まり、感じとることができた。大事な得がたい財産になった。

これらの内容は実習のその後の反省会では出されないことも多い。子どもたちの変化過程をみることができているからであろう。積み重ねてきた体験の成果でもであろう。



写真1 子どもたちとのびくびくどきどき体験

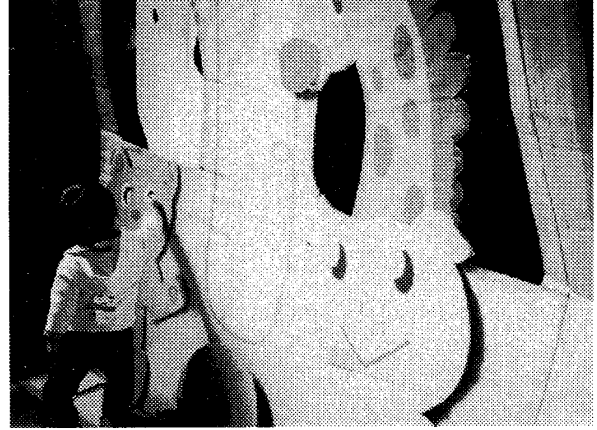


写真5 動物を認識, 識別をする段階

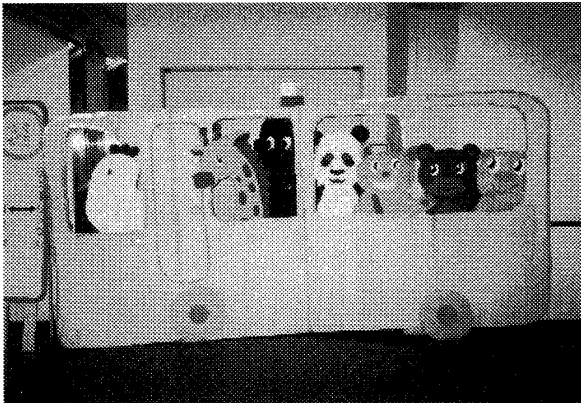


写真2 ピンクのダンボール製のバス



写真6 動物が友だちになる段階



写真3 ダンボール製の動物パンダ



写真7 バスに乗る友だちとの出会いを楽しみ遊ぶ段階

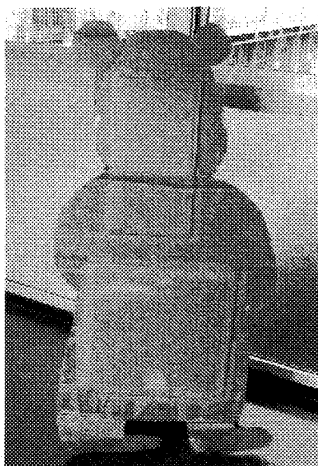


写真4 パンダの裏面

(3) 子どもの育ちにおいて、遊びのなかで影響を与えたとされるダンボール製の遊具と動物たちについての検討

広場ではなるべく危険性のない安全な場の確保ということを考慮したために、多くの遊具は準備しなかった。安全性ということと子どもたちが操作しやすいことも考えて、広場のなかに、1年前の先輩たちが創作したピンクのダンボール製のバス(写真2)と同じくダンボール製の動物たち(写真3)がいるようにした。この遊具が子どもたちにどのように受けとめられて場のなかで息づいていくものかということを見守ることも意図した。

この遊具は、当初の著者の予想をはるかに超えて、子どもたちにとってはかけがえのない「友だち」になっていった。ひとりの子どものなかでのこの経験はほかの子どもたちのなかにも一つひとつについて段階をふみながらの体験・経験になっていった。0歳児からである。そこに参加した子どもたちがこのダンボール遊具とともにその子ども自身のなかで段階性をふみながら、かかわりの過程を持っていったことになる。それは現在までも継続している。すでに2年近く使用していて、ぼろぼろになってはいるものの、もはやこの子育て広場のなかでは「欠かせない存在」にさえなっている。子どもたちのなかでの意味づけについての考察はさらに多くの文献などから、のちに検討することしたい。子どもたちがふまえた段階の過程について記載する。

資料1に詳細を記載した。

①ダンボール製の動物たちとの遊びの段階

ダンボール製の動物たちはゴリラ、パンダ、ねこ、くま、きりん、にわとりがいる。裏は描いていない。(写真4)くまときりんは当初はバスの乗客で、上半身のみである。

- i : 動物との出会いの段階
- ii : 動物を認識、識別をする段階(写真5)
- iii : 動物が友だちになる段階(写真6)

iv : 動物と一緒に遊ぶ段階

v : 友達としての仲間の動物たちを増やしていく段階

vi : 多くの動物たちと一緒に遊びを深めていく段階

この動物たちは裏が描かれていない。それでもそれが動物そのものになり、仲良くなっていく。この子どもも、あの子どもも、というように。それぞれの子どもたちが出会い、体験する過程をみると、ともにその動物たちへの思いを共有していく過程は、学生たちに遊具についての見方を根底からとらえなおすきっかけにもなった。

資料2に詳細を記載した。

②ダンボール製のピンクバスとの遊びの段階

バスのサイズは横342cm、たて66cm。

一人では動かせない。

- i : バスとの出会いの段階
- ii : バスを乗り物であるということを認識する段階
- iii : バスに乗って遊ぶ段階
- iv : バスと自分、運転する自分とさまざまな体験をする段階
- v : バスを動かす人になりながら楽しむ段階
- vi : バスに乗る友だちとの出会いを楽しみ、遊ぶ段階(写真7)
- vii : 友だちとともに遊ぶ段階：誘い誘われて楽しむ段階
- viii : 複数の友だちと工夫しながら遊ぶ段階

(4) 学生たち自身の子育て広場体験における自己点検・評価

①目的

学生たち自身が子育て広場の体験学習を重ねていったが、その体験で得たことなどについて、自分ひとりの思いだけにするのではなく、できれば客観的に評価ができるように考えた。ひとりよがりになるのではなく、その場において、一人の保育者としてどうであったのかについての一人ひとりの自己点検・評価である。当初と

1年半の2回実施することにした。

②評価項目

子育て広場における保育者自身について評価する指標というものはないために、保育者の自己点検・評価の内容24から子育て広場における保育者を評価をする項目として妥当なものを抽出・選定した。この評価項目は学生たちの1年先輩のゼミナール生たちが先に選定したものを、あらためて自分たちの場合のことを考えて再度見直した結果の項目になった。64項目になった。資料3

③結果

1回めの結果は観察体験であったことから評価項目の学習をしたことになる。その場でおさめられる保育者自身の学習になった。先輩たちがすすめていたことを知っていたために、それら項目を体験前に学習していたためか、保育者として、その場におけるかかわりかたとしてはどのようなことを配慮しながらすすめていくのかということの理解が先に学んでいた。2回めは、2年次終了時に実施した。体験したことをふり返ると⑩、⑳は概当しなかったという。㉑は学生の中で「していない」が2人いた。

点検・評価の実施にあたって配慮するべきところが、みずからの保育における留意事項になっていったようであった。具体的ないわゆる「ことばかけ」においては、やさしく対応することなど、それぞれがその場のなかで留意する事項をしっかりと取り入れながらの実践になっていったものと思われる。これらの結果については良い評価が得られたとまとめられる。また人に学んだことの背景には、教員の子どもへのかかわり方、卒業生たちのかかわり方などが実学としてあったこともあろう。最初に一度、1年半終えたときに実施した結果は、当初の内容よりもその後においては内容としてその質として求める内容が高いことを自覚したという。質には限りがないということについての理解も深まったようであった。点検項目の抽出とそれぞれの項

目内容の理解を深めた上で、子育て広場を担ったこと自体がすでに事前学習にもなっていたし、1年半体験後に評価をしたことによって、質や深まりのことへの理解に寄付し、学生個人が課題とすることが明確になっていったようである。

④点検・評価項目の妥当性について

子育て広場の特性からみると、どのような項目を選定、策定するといいいのかについてはまだ検討の余地があろうが、ここで選定し、評価した項目のことも含めて、ひとつの試み・実践したことの成果はあろう。

(5) 保護者からの評価と感想

そのときどきに保護者たちから口頭での感想はいただいていた。学生たちのゼミナール発表会に出席させてほしいという要請を受けて、発表会当日聴講していただいた。そのときに「私たち子どもと親たちが大変ありがたい場を提供してもらい、たのしく、安心して嬉しい体験をさせてもらっていたけれど、同時に学生さんたちに、子どもたちとのことで保育者として学ぶことにつながっていたということがとても嬉しく思いました。」という感想をいただいている。また資料4のように何人かの感想を記載したものをいただいた。保護者からの評価として受けとめている。地域について、及び大学の教員への期待がうかびあがってもくる。支援の内容は将来の専門職になる学生にも向けられているということがわかる。資料4は保護者が記載した感想である。名前が表記されているのとそうではないものがあったために、名前は削除させていただいた。子どもの名前もイニシャルにさせていただいた。

(6) 学生たちの体験学習の総合的な評価と課題

学生たちは白梅祭において、自ら創作する「子育て広場 春夏秋冬」を開催した。子育て広場での体験学習を重ねてきたときに、自分たちのみで運営する場を提供したいと考えたとい

う。白梅祭内で不特定多数の子どもたちを想定し、その場で十分に遊んでもらうことを意図したものになった。季節を感じてもらうもので29種類の遊びを入れたものになった。この内容については改めてまとめてみるが、総合的な子育て広場の評価としてあらためてまとめたものがある。

総合的にひとことでまとめると、「保育の質が学べた」という。その内容は8つになった。①保育者には子どもの育ちを見る目が大事であること、②子どもたちはひとり一人が個性をもちながら、段階を踏んで育つということ、育っていくということ③その育ちをみんなで見守りながら一人ひとりに対する援助内容を丁寧に考え、場の中で提供してかかわることができたこと、まずかったところについても評価修正の手がかりも得られたこと、よかったことの評価もできたこと、保育者としての自分の特性、弱点が見えてきたこと、④ゆったりとした時間はそこにいる人たちに穏やかさと安心感をもたらすこと；これらは保護者への安心感をもたらすこと、これが支援の内容になること、⑤これらのことは人が育つということにおいて大事な要素であるということが実感できたこと、⑥発想から想像・創造の実現に向かうには、計画からの手順をふむことですすめられるということ、場創りは創作的であること、⑦総合的な点検・評価および振り返りの視点が活動や体験においては常に必要とされること、客観的視点で整理することの必要性、⑧時間をかけて育ちを見つめていくことで育ち、育つということが見えてくること、その視点が大事であること、見守ることが大事であること、⑨一緒に創っている人たちと学び学びあう関係が育ち、育て合う関係になるということが学べたこと、などである。

その後学生たちがまとめた課題には、①どのような場でも子どもが安全に遊べる場の設営、空間配置ができるようになること、②子どもの動線を想定して、場の中で臨機応変に対応でき

ようになること、③地域の子育て支援活動に参画し、その場でも「実践力」を養うこと、地域に求められている支援内容を知ること、④仲間相互に保育実践現場や子育て支援現場で得たことを伝え合い、学びあうこと、そのようなネットワークを作ること、⑤保育に従事しながら研鑽を重ねていくことで、より質の高い保育者をめざしていくこと、であるという。

学生たちは、この総括をまとめたことによって、保育者として職場に就いていくときの姿勢のみならず、対応力の養成、さらに、地域のなかで子育て支援にかかわれるようになること、そして、研修の必要性についてまとめていくことができたことになる。

この3月に卒業したこのかつての学生たちはその後の子育て広場の「紅茶の会」にも参加している。卒業後においても、子どもが育つということとともに育ってきた経緯をふりかえりながら、育ちの過程をみつめたいという要望からである。新1年生や2年生たちとともに、卒業生としてともに影響しあえる人間関係を形成しているところである。

II. 保育者養成課程における子育て広場について

千葉明德短期大学の保育科は保育者養成課程の授業科目のなかに、演習として子育て広場の機能を持つ場の体験学習を加えている。授業そのものに加えらるることによって、保育内容総論などの授業内容のがより豊かになることが想定されるものの、子育て広場はいわゆる幼稚園や保育所などの保育現場ではない。保育園、幼稚園における現場とその子育て広場との違いについて、および、それぞれの場において求められる保育者の資質に関する内容について、そこで体験学習する学生たちに対して丁寧に應對していく必要があるものと思われる。東横学園女子短期大学は3年制の保育科である。2年間に凝縮した忙しさのなかでの養成とは異なり、1年あるメリットがあろう。そこに、東京都内世田谷地域の子育て支援の活動の

一環として子育て広場ピッピーを立ち上げて開設、子育て渦中にある保護者たちに広場が活用されて賛同を得ているという。広場は常設で、遊具、保育士も3名おり、学生たちは2年次から任意で参加することが期待されているという。常設、常時開催時間帯には子どもとその保護者たちが集まっているということは、子どもたちと触れ合う時間の体験学習としては機能していくことになろう。ただ、学生たちが主体的にその場を担うということにはなっていないと思われる。

ここで論じた白梅学園短期大学内の佐々ゼミナールの取り組みのように、運営にいたるまでの過程を体験するということから学ぶ内容に違いがでてくるかもしれない。

また、白梅学園短期大学保育科でもすべてのゼミナールがこのような体験学習をしているわけではない。05年度の金田ゼミナールにおける世代間交流、短期大学の多くの学生が任意に参加することが可能な、子育て広場の「あそぼうかい」がある。障害児関係では05年度の堀江ゼミナールの活動もある。保育者養成において、ここに挙げた体験が加えられることは、養成課程における新たな保育者像への質への取り組みになろう。

多くの養成校において、保育・教育の質に向かわせるための取り組みとしてはさまざまな取り組みがなされている。養成課程に組み入れている場合には従来の場合との違いが求められようし、組み入れられていない場合には多くの学生が体験できないことになる。養成課程において、現状の社会状況からみると多くの体験学習を加えていくことが要請されていると考えられる。

この白梅学園大学、短期大学においては、今年度から全学生に向けて子育て広場の活動を位置づけていこうとしている。現在の子育て状況をみると、今や、免許・資格を取得するための必修の実習だけでは事足りてはいかないとも思われる。保護者との対応、虐待にかかわることについてのみならず、気になる子どもたちの個別的に丁寧なかかわりを求められる子どもたちも増えてきてい

る。これから先の保育者に求められてくる専門性の高い内容をとらえるにつれて、従来からの養成課程にある科目群の授業内容の検討と新規の取り組みにおいて得られた内容についての検討が必要であろう。教育課程にある教科相互間関係・連携を、およびFDを定期的に機関として実施していくこと、さらに、今回の取り組みからの養成課程への提言が求められよう。そこにはかなり教員側集団としての連携が必要になろうし、実習との関係などを新たに見直していくことも求められてくるように思われる。また卒業後の職業人として現場に就いていくひとやリカレント教育にも波及していくものではないかとも思われる。

Ⅲ. 保育者養成機関としての機能への提言

① ネットワークの発信の場となること

保育者養成機関同士の間として、保育士については全国保育士養成協議会がある。養成機関同士が行政の動向もとらえながらさまざまな発信・受信をしている。保育者養成は保育士のみではない。今後の社会全体のなかでとりわけ、NPO法人を初めとした子育てにかかわっているところがある。それぞれの地域のみならず、広域でネットワークを形成し、機能させていくことが求められよう。

ネットワークの発信の場として養成校は「核」にもなりえよう。行政の取り組みのなかでたとえば、病児の預かり保育に代表されるように、求めの保護者に応じる場所が必ずしもあるわけではないことがある。そのいわば隙間にどのように対応するのかということは問われてくることである。

② 養成側がもてる知恵・知識・知見を生かすこと
養成側の知見等が必ずしもそれぞれの子育てにかかわるところで生きているということではないことも多い。筆者が長年かかわってきている多くの自治体のファミリー・サポート・センター事業においては、時の三位一体論のなかで、補助金が削られてきており、地域の援助者予備軍および活動を担ってきた人たちのその後の研修、交流会の活動そのものをも制限することになってしまっ

ている。いまや、子育て支援は多くの人の力を借りながらすすめていかななくてはならなくなっているのに逆行している現状がある。それらについても知見を持ち合わせている側においては発信していくことがもとめられよう。

地域による差異がまだまだある。広域での連携をとりながら、より子育て環境自体がよりよくなるような対応策を講じていくためにも、養成校の果たすべき役割はあるものと捉えている。③養成の教育課程への提言をすること、卒業生の現場体験のなかに、現状の子育て状況に対応していけるようになるには、現在の養成課題には足りないと思われる内容がある。子育て広場の体験は多くの学生や卒業生においても実践してもらいたいものである。それぞれが選択した現場に就く前に求めていく保育の質にかかわるものを新たに受け入れながら実績をつくること、その質を養成するためにはこれらの実践内容が必要ということを確認することがあろう。それにはさまざまな取り組みを実践している養成側の人たちとのネットワーク作りもすすめることによって、それぞれの体験のなかから質に寄与できる内容を抽出していくことが求められよう。これらは、先での養成課程への提言になりうると考えている。

まとめ

ここでの子育て広場の体験学習の成果は保育の質にかかわるもので、1年半の子どもたちと保護者たちの育ちをともにみつめることができた。1年半の14人の体験学習ではあったものの、学生たちの育ちの過程は子育て支援全体にかかわってくるものと考えている。保育者養成課程に組み入れていくには大変な壁をいろいろと乗り越えていかななくてはならないかもしれないが、組みなおしの一助になるのではないだろうか。現場は保育園や幼稚園、児童福祉施設という機関のみではなく、なってきたことを踏まえいくと、さまざまなところで活躍する人をも輩出していくことも求められてもこよう。このことは改めて養成機関に期

待されていることなのではないだろうか。

この取り組みはすでに記述したように、現職の保育士である卒業生もかかわってきた。かれらのこの体験がその職場において寄与している内容については別に論じていきたい。

おわりに

白梅学園内の子育て広場のひとつに、登録型の紅茶の会の開催を認めていただいた。そのことがこの成果とつながってきた。さらに、白梅学園教育・福祉センターのなかに子育て広場に助成金がいただけたことはこの実践における研究面での援助につながっている。改めて謝意を表したい。またともにすすめてきた学生たち、卒業生たち、保護者とその子どもたちには場のなかでもその後においてもさまざまなことを考えなおさせてくれるきっかけになった。育ちの変化過程についての細やかな検討や子どもにおける遊びの変化過程についての考察などはまだ残されている。今後にまとめていきたい。

参考文献

1. 原田正文 (2004) 子育て支援とNPO, 朱鷺書房
2. 飯田進, 菅井正彦 (2000) 子育て支援は親支援 その理念と方法, 大揚社
3. 伊志峰美津子, 新澤誠治 (2003) 21世紀の子育て支援・家庭支援 子育てを支える保育をめざして, フレーベル館
4. 垣内国光, 櫻谷真理子編 (2003) 子育て支援の現在 豊かな子育てコミュニティの形成をめざして, ミネルヴァ書房
5. 柏女霊峰 (2004) 子育て支援と保育者の役割, フレーベル館
6. 加藤邦子, 飯長喜一郎編 (2005) 子育て世代, 応援します!, ぎょうせい
7. 柏木恵子, 森下久美子 (2000) 子育て広場 地域子育て支援の挑戦 武蔵野市立 0123 吉祥寺, ミネルヴァ書房

8. 興石薫 (2005) 育児不安の発生機序と対処法
略, 風間書房
9. 国立社会保障・人口問題研究所編 (2003) 少
子社会の子育て支援, 東京大学出版会
10. 今野雅裕 (2002) 地域の子どもが健やかに育
つ 公民館子育て支援活動, 日常
出版
11. 鯨岡峻 (2005) エピソード記述入門 実践と
質的研究のために, 東京大学出版会
12. 前田正子 (2003) 子育てはいま 変わる保育
園, これからの子育て支援, 岩波書店
13. 丸山美和子 (2003) 子ども発達と子育て・
子育て支援, かもがわ出版
14. NPO 法人びーのびーの 奥山千鶴子, 大豆
生田啓友 (2003) 親たちが立ちあげた おや
この広場 びーのびーの, ミネルヴァ書房
15. 大場幸夫 (2003) 育つ・ひろがる 子育て支
援, トロル出版部
16. 大豆生田啓友 (2006) 支え合い, 育ち合いの
子育て支援, 関東学院大学出版会
17. 佐々加代子 (2004) みんなで育て合う 地域
の子育て支援の実際と課題, 犀書房
18. 佐々ゼミナール (2005) 04 年度白梅学園短
期大学保育科佐々ゼミナール発表資料
19. 佐々ゼミナール香川沙耶ほか (2006) 子育て
広場創りと保育, 全国保育士養成協議会関東
ブロック協議会第 19 回学生研究発表会発表
要旨集, 全国保育士養成協議会関東ブロック
協議会, 46-47
20. 汐見稔幸編 (2003) 世界に学ぼう! 子育て支
援, フレーベル館
21. 杉山千佳編 (2001) 21 世紀の子育てのあり
方 現代のエスプリ N0.408, 至文堂
22. 杉山千佳 (2005) 子育て支援でシャカイが変
わる, 日本評論社
23. 高橋たまき, 中沢和子, 森上史朗編 (2004)
遊びの発達学 基礎編, 培風館
24. 民秋言編 (2003) 保育士のための自己点検チェッ
クリスト, 萌文書林
25. 植田章 (2004) はじめての子育て支援 保育
者のための援助論, かもがわ出版
26. 矢澤澄子, 国広陽子, 天童睦子 (2003) 都市
環境と子育て—少子化・ジェンダー・シテ
イズンシップ—, 頸草書房
27. 全国保育協議会編 (2005) 保育年報 2005
地域子育て文化の創造と保育所の役割
28. 全国私立保育園連名経営教科委員会編 (2002)
地域子育て支援のい・ろ・は, 筒井書房

資料1 ダンボール製 動物たちと子どもとの遊びの段階

遊びの段階	内 容
1. 動物との出会いの段階	視野に入る ↓ 認識 ↓ 近づく, 指差し
2. 動物を認識・弁別する段階	周囲の大人からの知らせ ↓ それぞれの動物を認識・弁別 ↓ 名前を呼ぶ, 指差し ↓ 触れる
3. 動物が友達になる段階	一緒に遊ぼうと連れ出す ↓ 大きい動物は大人の助けを求める ↓ やりとりを楽しむ(心の中で又は大人が動かしながら) ↓ 動物を抱きしめる, キスをする
4. 動物との遊びの段階	一緒に散歩をする ↓ ごっこ遊びをする ↓ 仲間を増やしていこうとする
5. 仲間を増やしていこうとする段階	動いているバスに気づく ↓ 乗客に仲間を見つけ, バスに乗る ↓ 動物を誘って降りようとする ↓ 貼り付いている動物を連れ出せず泣き出す ↓ 動物をバスからはずす
6. さまざまな動物と遊びを深めていく段階	動物の姿全体を想像しながら遊ぶ ↓ さらに仲間を増やして遊ぶ

資料2 ダンボール製のピンクバスと子どもとの遊びの段階

遊びの段階	内 容
1. バスとの出会いの段階	<p>視野に入る</p> <p>↓</p> <p>① 近く 認識できない ② 遠く 全体像から認識</p> <p>↓</p> <p>指差し。近づく</p>
2. 認識の段階	<p>↓</p> <p>周囲の大人からの知らせ</p> <p>↓</p> <p>バスを認識</p> <p>↓</p> <p>見つめる(遠く又は近くから)</p> <p>↓</p> <p>声を出して認識・指差し⇒認識を深める</p> <p>↓</p> <p>触れる</p>
3. バスの遊び体験の段階	<p>動いているバスに気付く(動かすのは学生)</p> <p>↓</p> <p>バスの性質を理解</p> <p>↓</p> <p>バスに乗っている乗客(動物や学生)を見つめる</p> <p>↓</p> <p>バスに乗りたくなる</p> <p>↓</p> <p>バスに乗る</p> <p>↓</p> <p>バスから手を振り、乗っている自分を知らせる</p> <p>↓</p> <p>降りる</p> <p>↓</p> <p>貼り付いている動物が降ろせなくて泣き出す (↑動物の資料参照)</p>
4. 自分の世界を広げる段階	<p>バスが走っている姿に気付く</p> <p>↓</p> <p>バスに乗り込む</p> <p>↓</p> <p>運転手になりきる</p> <p>↓</p> <p>自分の世界を広げていく</p> <p>↓</p> <p>繰り返し遊ぶ</p>
5. 広がる世界の中で遊び込む段階	<p>自らバスに乗ろうとする～「バスに乗りたい」</p> <p>↓</p> <p>自分の世界の中で、運転手になりきる</p> <p>↓</p> <p>降りる</p> <p>↓</p> <p>再び乗ろうとする</p> <p>↓</p> <p>行き先を決める(大人の援助を受けて)</p> <p>↓</p> <p>出発</p> <p>↓</p> <p>毎月遊ぶようになる</p>

資料2 ダンボール製のピンクバスと子どもとの遊びの段階

遊びの段階	内 容
<p>6. <u>友達との出会いの段階</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 1. ダンボール製の動物たち (ゴリラ, パンダ, ねこ, くま, きりん, にわとり) 2. 子どもたち 	<p>バスに乗って遊んでいる中で, 友達と関わりを持つ</p> <p>↓</p> <p>同じ遊びをする友達に関心を持つ</p> <p>↓</p> <p>遊びを通して, 友達と楽しさを味わう</p>
<p>7. <u>友達と遊びを楽しむ段階</u></p>	<p>友達と遊びたいと思う</p> <p>↓</p> <p>友達と一緒に遊ぼうと近づく</p> <p>↓</p> <p>バスで遊ぶ中で友達と楽しさを味わう</p> <p>↓</p> <p>バスで友達と遊びたいと思う</p> <p>↓</p> <p>友達を誘って遊ぶ</p> <p>↓</p> <p>友達と話しながら遊びを楽しむ</p>
<p>8. <u>友達と遊びを進めていく段階</u></p>	<p>友達と行き先などを決めて遊びを進めていく</p> <p>↓</p> <p>友達と工夫をして遊ぶ</p> <p>↓</p> <p>友達を増やして遊ぼうとする</p>
<p>9. <u>複数の友達と遊ぶ段階</u></p>	<p>友達を誘う</p> <p>↓</p> <p>複数の友達と遊ぶことを楽しむ</p> <p>↓</p> <p>皆で相談し, 工夫して遊ぶ</p> <p>↓</p> <p>さらに工夫して遊んでいく</p>

資料3 子育て広場における自己点検チェック項目

1	わかりやすい温かな言葉で、子ども一人ひとりにおだやかに話しかけていますか
2	「早くしなさい」などという、せかす言葉を不必要に用いないようにしていますか
3	「だめ」「いけません」など制止する言葉を不必要に用いないようにしていますか
4	子どもの要求や質問に対して「待ってて」「あとで」などと言わずに、なるべくその場で対応するようにしていますか
5	「できない」「やって」などと言ってくる子どもに対して、その都度気持ちを受け止めて対応していますか
6	「いや」などと、駄々をこねる子どもの気持ちをくみとろうとしていますか
7	子どもが自ら体を十分に動かして遊べるように工夫していますか
8	子どもの冒険心を大切にするなど、生き生きとした活動が展開できるように配慮していますか
9	子ども同士の関係をよりよくするように、あなたの言葉がけに配慮していますか
10	順番を守るなど、子どもが社会的ルール(きまり)を身につけるような機会を大切にしていますか
11	人の立場を考えながら行動することの大切さについて、ていねいに伝えていますか
12	異年齢の交流がしぜんな形で行われるように配慮していますか
13	身近に住んでいる人と関わる楽しさや大切さを味わうことができるよう配慮していますか
14	紙芝居や絵本の読み聞かせのときは、その文の美しさや言葉のリズムの面白さを大切にしていますか
15	紙芝居や絵本の読み聞かせのときは、あなた自身もその内容を楽しんでいますか
16	子どもが、自分の意見をはっきり言うことのできる雰囲気をつくっていますか
17	話の結論がわかっている場合でも、最後までゆったりと子どもの話を聞くようにと努めていますか
18	子どもの言葉の発達の過程を、専門的な目で詳細に観察していますか
19	生活に必要な簡単な文字・記号などに、興味や関心をもつよう配慮していますか
20	子どもが自由に、歌をうたったり踊ったりできるように配慮していますか
21	子どもがつくったり表現したものを、お互いに見せ合ったり聞かせあったりするよう配慮していますか
22	子どものイメージが湧き出るように、素材、用具、玩具等を提供するなど工夫していますか
23	言葉、絵、造形、音楽など、子どもが最も得意な方法で、見たもの感じたものを表現することを大切にしていますか
24	道具の正しい使い方を、一人ひとりていねいに教えたり、見守ったりしていますか
25	抱いて目をあわせたり、微笑みかけたりしながら、ゆったりと授乳していますか
26	おむつ交換は、やさしく声をかけながら行っていますか
27	喃語には、ゆったりとやさしく応えていますか
28	絵本を見せた時、その子の指すものに答えるなど、子どもとのやりとりを楽しんでいますか
29	たて抱き、腹這いなど、子どもが様々な姿勢をとれるよう努めていますか
30	身体を適度に動かす遊びや、リズムを作った触れ合い遊びを十分にしていますか
31	一人ひとりの子どもの出生時の状況、その後の発育・発達などを細かに把握していますか
32	一人ひとりの子どもにいつでもやさしく対応するように努めていますか

33	障害のない子どもも障害児も、互いの良さを感じとるように心を配っていますか
34	「男の子だからめそめそするな」などと、子どもの態度について、性差への先入観による固定的な対応をしないよう配慮していますか
35	「それは女(男)の子の色」などと、子どもの服装や持ち物について、性差への先入観による固定的な対応をしないよう配慮していますか
36	「それは女(男)の子の遊び」などと、子どもの遊び方について、性差への先入観による固定的な対応をしないよう配慮していますか
37	「それは女(男)の子の仕事」などと、職業について、性差への先入観による固定的な対応をしないよう配慮していますか
38	子どもが落ち着いて食事を楽しめるように、工夫していますか
39	食事を「楽しく、おいしく」味わえるように、食卓の雰囲気づくりを工夫していますか
40	送迎の際に保護者と会話するよう心がけていますか
41	地域の保育ニーズを把握しようと努めていますか
42	子どもが心地よく過ごすことができるよう、採光に配慮していますか
43	子どもが心地よく過ごすことができるよう、換気や温度・湿度に配慮していますか
44	玩具・遊具は、時には消毒するなど、衛生面に配慮していますか
45	子どもが眠くなった時、安心して眠ることができる場所を保育室に用意していますか
46	食事のための場所を保育室に確保していますか
47	季節にあわせて保育室のインテリアを工夫していますか
48	保育中の音楽など、音に配慮していますか
49	保育中にあなた自身の声の大きさに配慮していますか
50	子どもの発達段階に適した玩具・遊具・用具を用意していますか
51	クレヨン・粘土・紙などを、子どもたちが自由に使えるように工夫していますか
52	子どもが用具などを自由に取り出して遊べるように工夫していますか
53	子どもがそれぞれ好きな遊びができるコーナーを用意していますか
54	子どもが自由に遊べる時間を確保していますか
55	子どもの作品を工夫して飾ったり、ていねいに保存したりするなど、大切に扱っていますか
56	自己点検・自己評価など、自分の保育を振り返る機会を定期的にもっていますか
57	自分の保育についての課題を具体的に見つけようと努めていますか
58	研修に参加したり専門書を読むなどして、保育に関わるさまざまな知識や技能の向上に努めていますか
59	国や自治体の公刊物、インターネットなどで、保育関係の情報を収集するように心がけていますか
60	職務上知り得た子どもに関する情報について、たとえ自分の家族や友人にでも、話さないようにしていますか
61	事故や災害が生じた際の対処の方法について、マニュアルなどを通じて十分に理解していますか
62	事故や災害が発生した際に、きちんと対処できる自信がありますか
63	施設・設備の安全に関する点検を、確実にを行っていますか
64	衛生管理に関する点検を、確実にを行っていますか

資料4「紅茶の会」 保護者の方々からの感想

1) 佐々先生、生徒さん、広場の会に参加して くださる現役の保母さんにお会いして

子どもを出産し我が子のかわいさ、成長を日々実感するだけでなく今までは知らなかった子育てにかかわる社会について知り始めました。それは周りの方々に支えられ、助けられて子育てをしているのだと感じます。また素直に助けを頂き交流を続ける事が親子ともにより成長していける事でもあるようです。

私は両親や小さい頃から私の成長を見てくださった両親以外の方々から私自身の幼少期の話を聞いたりすることが嬉しかったりしました。私も両親、社会に育ててもらったのだと実感します。

親バカのようにもありますが少しでもたくさんの方に我が子の成長を見て頂き、私も周りの子供の成長を見ていきたいと思う日々です。

ご迷惑ではないかと思いつつもお願いして広場の会を設けてくださった佐々先生、遊んで下さってる生徒さんに感謝すると同時に将来立派な保母さんになるであろう生徒さん達を心から応援しております。頑張ってください。

ありがとうございます。

2) 学生さんと子供達の関係が当初と今とは違う様に思います。

当初は、学生さんもどのように子供と接しているのか考えながら、いたように思います。

子供も、どう遊んでいいかわからないのか、親の近くで遊んで、いたと思います。ところが、日に日に学生さんと子供達との間で親近感がわいてきたのか、親の近くで遊ぶよりも学生さんと、遊ぶ子の方が多くなってきました。

今では、月1回の広場の会を、とても楽しみにしています。Aは4月から、幼稚園ですが、今後も土曜に開催していただけるという事で、親子、で楽しみにしています。

3) 広場の会について

佐々先生の講座に参加し、その後広場の会が始まり、初回から参加しています。小平は児童館が少なく、屋内で安心して子供を遊ばせられる場（無料で）が少ないので、このような場があるととてもうれしいです。

先生や学生の皆さん、いつも楽しく遊ばせてもらってとても感謝しています。

体育館という場も広々していて、親は安心して目がはなせるし、子供は自由に走りまわって良いです。特別にプログラム等がないのも良いです。走っている子もいれば絵を描いている子がいる、みんな自分の好きなことをしていて楽しそうです。子供達1人1人の個性も見えて、親もおもしろく見えています。

先生や学生さんが「大きくなったねー」とか「上手ね」とか、自分の子供に声をかけてくれるのは本当にうれしいです。日々忙しくどなればかりいますが、人にそう言われることで、少しほっとし、うちの子もいいところがあるのかも…なんて思います。

それから毎回作っていただく可愛い名札、みんな表情が違うのを子供に選ばせてくれてうれしいです。長女は家に帰っても名札をつけたがり、何日も家でクタクタになるまでつけています。手遊びをやってもらった日は覚えて帰り、家でも楽しくやっています。

親同士も子供を安心して放し飼い（←言葉が悪いのですがピッタリの表現かな）にでき、おしゃべりしてストレス発散させてもらっています。

子供の目から見ても男性の学生さんがいるとうれしいようで、男性がいた日は「今日お兄ちゃんがいた」と話しています。遊んでくれる内容が、やはり男女で違うのでしょうか。

まともらずに申し訳ありません。とにかく親子で楽しく過ごさせてもらっています。子供を抱っこしなくておしゃべりできる場、これからも続けてもらえるとうれしいです。皆様ありが

とうございます。

- 4) 月に一度の広場の会を通して、M又お友達の成長を見れる事を嬉しく思っています。

又、育児のちょっとした疑問等先生からのアドバイスを頂ける事を感謝しています。

学生さん、卒業生の方々にも毎回温かく接して頂き安心した気持ちで子供達の遊ぶ姿を見れる事も大変嬉しく感謝します。

今後この会で、子供と伴に自分も楽しく色々な事を学んでいける事を願っています。

- 5) 「広場の会」に参加して

広場の会に参加をしてたくさんの友達や大人と接し子供にとってはとても良い体験になっていたと思います。

家ではできない大きな製作おもちゃや自分で作るおもちゃなどはとても嬉しかったようです。

広く安全な室内は、あまりないので親としてもありがたいと思っています。

月に1度の会なので参加できないと残念ですが、できるだけ予定を合わせて親子で楽しく参加させてもらいたいと思います。

- 6) 「広場の会に参加して」

この、広場の会では、色々な年の子や、たくさんの大人と関わりが持て、それが子供にとって、とても良い刺激になっているようです。お姉さんのまねをしてみたり、今まで気づかなかった遊び方を覚えたり…たくさんの新鮮な体験が楽しいようで、うちの子はこの会が大好きです。私にとっても、ここで会う、お母さん達との交流は、すごく息抜きにもなり、悩みを解決するためのかてもあります。

私達、親子にとって、月に1度のこの会が、今では、とても大切な存在になっていると思います。また、一生懸命、子供たちと遊んでくれる学生さん達に、家では見る事のできない子供の顔を見ることもでき、親にとっても、良い

刺激になっていると思います。

これからも、このような会を通じて、ゆったりとした気持ちで、子供の成長を見守っていきたいと思っています。

- 7) 昨年度の佐々先生の講座終了後、参加をさせていただいています。

月1回の広場の会ではママからいつもなかなか離れられないでいるものの、体育館を走り回り毎回楽しく過ごしています。普段あまりかかわることができないお姉さん方（学生さんや卒業生の方々）から働きかけ、遊んで下さるので娘も少しずつですが当初の遊びよりも幅が広がってきたように思えます。また、いつも先生がいらっしゃるので成長をずっと見て頂けることまた日頃不安に思っている育児のことも随時お話できるので私にとっても、心強い集いです。毎回、お手数をおかけしておりますが、今後ともよろしくお願ひしたいと思っています。

- 8) 広場の会について

広場の会では毎月大変お世話になっております。

私達母子が広場へ参加するようになって1年半ほどになりますが、当初は私から子供が離れず、せっかく広場へ来ても最初から最後まで親子二人で遊んでいる事が多くありました。それがだんだんと子供が自ら離れていって、逆にお気に入りのお姉さんから離れなくなり、母親として複雑な気分を味わっております。

お姉さん達に遊んでもらっている子供を見ると、普段なかなか見えない部分が第三者の目として見られるようで、我が子ながらあんな事でこんなに喜ぶんだとか、あんな風に自分をアピールしてお姉さんに気づいてもらおうとしているんだとか、新鮮な発見があります。また少しの間子供から目を離して、友達とお喋りが出来る貴重な時間でもあります。こういう場を設けていただいた佐々先生と、誘ってもらった

友達に感謝しつつ、幼稚園へ上がってもこの時間を大切に、参加させてもらえたらと思っています。

9) 佐々先生「広場の会」感想

◎佐々先生とは市民講座での出会いをきっかけに1年半近くの市民との交流をしていただきました。私達親子にとっても、客観的に自分の子供を見られる良い機会でした。短大のお姉さん達は、慣れていないもののいつも子供達に笑顔で接していただき保育者の笑顔こそ子供をひきつけるものだ実感できました。子供達が普段の生活にはない広い場所や様々な遊びや動きにふれさせていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

10) 佐々先生（広場の会の皆様）と出会って

・初めての育児でしたので、不安がいっぱいあり、その相談を先生にすることができ、その度に気持ちがらくになりました。

また先生を通して広場の事を知り、参加するようになり、生徒さん達に遊んでもらって助かっています。

うちは、まだ私から離れて遊ぶことはできないのですが、皆の様子をじーっと見ているので、いつか離れて遊べるようになるのでは…と思っています。

11) 広場の会について

月1回ですが、毎月楽しみにしています。子どもにとっては、異年齢の子や、お姉さんたちと遊ぶ絶好の場であり、学生さんの手遊びなどは、とても喜んでいます。

家にいると、ついつい小言を言ってしまうことが多くなりがちですが、広場の会で、のびのびと遊べることは、親子共に「ゆとり」となっています。

又、親同士の情報交換の場にもなり、友達の間も（母の）広がりました。月1回というより、

もっと増やして欲しいくらいです。

普段の子育ての中で悩んでいることがあったりしても、参加されている方々や、先生の一言に考えたり救われたりすることもありました。今後も可能ならば広場の会がつづくことを期待します。